

黄金の雨を降らせる花火で、画面の二つの大きな黒いしみは、クレマーン公園の塔と見物している群衆を描いたものと思う」と書いている。この作品は Ruskin が「公衆の面前に絵具つぼを投げつけて200ギニー要求した」と言った為 Whistler が訴え、裁判の結果 Ruskin が敗けて罰金を払ったいわくつきの作品である。「これらの絵は確かに鑑賞するだけの価値があるが、実際の花火が見える時間、つまりたかだか15秒ぐらいの間である。」先の訴訟事件が起る前であるのに Wilde のこの皮肉な筆は、かれが存外、古典派の美術を好み、新しい絵画に反撥する感覚を持っていたことを示しているようだ。

しかし新しい芸術論を掲げ、それを絵画に奔放な警句にと表現していた Whistler に Wilde は染っていき、*Symphony in Yellow* や *Impression du Matin* といった色と形と線の交響楽のような Whistler の絵画ふう印象詩を作り、Whistler が室内装飾をした家に住み、アメリカ旅行中のインタビューでは Whistler を自分の Hero であるとさえ答えている。しかし1885年の評論 *Mr. Whistler's Ten O'Clock* では、「日々の生活に於ける美の価値に関しては、Whistler 氏とはまったく意見を異にする」と断言し、画家だけが絵の価値がわかるのではない、「詩人が最高の芸術家だ」と言って剽窃呼ばわりをする Whistler と袖を分つのである。

「すべての芸術は音楽を憧れる」とした Pater の芸術観と同じものを Whistler の純粹絵画空間の主張に見ていた Wilde は、P. R. B. たちの生活の美化に共感を覚えて、*House Decoration* や *The English Renaissance of Art* (1887)、そして *The Relation of Dress to Art* (1885) 等を書き、自分の審美的服装にそれを表現した。もともと音楽的感受性の乏しかった Wilde にとって、絵画は芸術論展開の上で大切な媒体であった。評論集 *Intentions* (1891) 解釈のための重要な糸口が、これら初期の美術批評の中に見出されるのである。

## 海外情報

### —Wilde の残り香—

井村君江

(明星大学教授)

「かれはヴィクトリア朝の人たちよりわれわれの世界に属している」Richard Ellmann の伝記 *Oscar Wilde* の最後の章の言葉である。「われわれの世界」に視点を据えヴィク

トリア朝の偏見の曇りを払った眼で、Wildeの生涯とその存在の意味、作品の価値を定めた Ellmannの本は、イギリスで大きな反響を呼び、すぐベスト・セラー再版となり、ロンドンの書店から西南端ペンザンスの街のウィンドーにも、緑に Wildeの肖像を刷ったポスターが下がって、まるで新進作家、否、新進俳優登場の感すらあった1988の年末であった。Ellmannの娘 Lucy (1956年イリノイ生まれ、エセックス大美術出身)の小説 *Sweet Desserts* が追うように刊行されたが、フィクションとなっても、喉をつまらせ半裸で階下に現われる Daddyの姿には、執筆を終え死期が迫った Ellmannの壮絶な姿が感じられる。

Oxfordの Ellmannの影の下に、Cambridgeのホマトン・カレッジのイギリス演劇科主任である Peter Rabyの *Oscar Wilde* (Cambridge Univ. Press 1988)は隠れてしまったようであるが、作品分析を中心に Wildeの現代性を prose-poem, dance-drama, melodrama, fairy-tales と当時余り他の作家が用いない文学形式に依って作品を書いたところにあると指摘した、新しい示唆に富む Introductory な著書といえよう。

遂に Clark Memorial Library 所蔵の Oxford 時代 (1874-79) の Wilde のノートブックが、P. Smith と M. Helfand の手で *O. Wilde's Oxford Notebook* (1989) として刊行され喜ばしい。Spencer や Hegel の哲学、Plato や Aristotle の Hellenism を研究していた Victorian Humanist の有望な文学者の面が明るみに出て、今後この視点から誤解の多い Wilde 文学の再評価が期待できる。

Wilde への new revaluation が次々出て *The Times* や *Independent* 各紙に載る書評が人々の関心を惹くと、古書の値が上りまた直筆原稿や書簡が市場に現われてくる。昨年ロンドンの Maggs Bros Ltd. に沢山 Wilde の書簡が現われたがまたたく間に売れてしまい、ペンザンスの David Lay のオークションには、Wilde がシスティナ・チャペルで書いた “On hearing the Dies Irae” の下書きが出たが、元値の5倍で他に取られてしまった。Wordsworth の手紙の10倍の高値である。R. Hart-Davis 編の *More Letters* で殆んど書簡は出版されたと思われていたが、未刊行のものがいくつか市場に出たので、その一通 Paris で書かれた手紙を購入、日本へ持ってくる事が出来た。

劇作品上演は *Importance* もあったが (Earnet Producing), Bracknell 夫人も男性が演じ興味深かったが、素人芝居的であった。1988年はロンドンの各劇場では *An Ideal Husband* の方がひんばんに上演された。1989年4月20日現在も Westminster 劇場で上演中であるが、Comedy (Comedy of Manners と書いて欲しかった) として入りもよくロングランになりそうな気配である。昨年9月 Richmond Theatre で上演されていた時と演出 (Patrick Sandford), 主役 (Jeremy Sinden) は変わっていない。ヴィクトリア中流階級の上品な雰囲気やアールデコ風な瀟洒な装置と衣装が醸し出し、巧みな会話の witty な cynical なやりとり、観客の笑いがたえなかった。

第三幕で喉の渇いたロバート・チルトーン卿が、召使いのフィップスに「Hock & Seltzerを持って来るように」と言いつける。Richmond 行のチュウブに乗る前、滞在していた Cadogan Hotel でちょうどこのカクテルを飲んできた所だったので、舞台が一気に近づいたような感じがした。104年前 Cadogan Hotel の一室で、White Wine と Soda Water のカクテル ‘Hock & Seltzer’ を飲んでいる時、Wilde は逮捕されたのであった。詩人 Sir John Betjeman は ‘*The Arrest of Oscar Wilde at the Cadogan Hotel*’ という詩でそのことを歌っている。一室とは女優 Lillie Langtry の豪華な青の間であり (特別の鍵がある)、奥の階段は、Langtry の昔の建物へと通じているが一般には使われず、廊下の反対側は ‘Lillie Langtry’ という名のレストランになっている。

Chelsea の Redcliffe Road に、ロンドンの一つの拠点を置いた年末、入居前の一時的な足場としてこのホテルを選んだのだが、Tite Street 34 の家から近く (そして憧れの Lillie の昔の家ということもあり)、Wilde と Cadogan の関係が実感できた。こうしたことを Estate Agent のレディ Cindie Momber に話したところ、実は自分は Lord Alfred Douglas の血をひく者であると言われ驚いた。Douglas の名前は祖母が生きている内は口にするのは御法度だったが、自分は Wilde の作品のあるものは Douglas との関係から生れており、また Wilde にとって大切な存在だったと思うので、いまでは Douglas の血をひくことを恥じていない。美しい画家志望の Cindie の意見に賛成しながら、またもや Wilde を身近に感じた。という Wilde の残り香は、ロンドンの「われわれの世界」にまだ強く漂っているのを実感している。

## 世紀末女性の変身願望

山 田 勝

(神戸市外国語大学教授)

### (1) 女性の意識変革と社会状況

十九世紀中頃から末期にかけてヨーロッパを駆けめぐった「フェミニズム」には種々雑多な要因があったように思える。それはかならずしも、女性自身の心身から湧き上がってきたものとは言いきれない。当然、人間の平等意識がその根底に流れているものの、男性側の「スノビズム」にも起因していた。

スノビズムとは、貴族にとって変わって、実質的権力を握ったブルジョワ階級 (プチ・